

昼間は親子連れや学生たちで賑わう遊園地。

この遊園地では夏になるとプールが開放される。

ここ数年はナイトプールも開催されているようで、ウェブライターである私はここに取材に来ていた。

「……さすがナイトプール」

目の前を通り過ぎた女の子二人組を見て、小さく声が漏れる。

なかなかきわどい水着だ。

全力でナイトプールを楽しみに来ました、って感じの。

それに比べて私は、一応水着は着ているものの、さらにその上に薄手のパーカーを羽織っている。

ナイトプールの客としてはどう考えても浮いているだろう。

実際に客ではないにしても、もう少し雰囲気に合わせてべきだったかもしれない。

……とりあえず、記事の中でこのプールをどんな言葉で表現しようか。

流れるプールで流される人たちを見ながらぼんやりと考えていた。

しばらくそうしていると、ふと、私の視界の端に二人の男が入ってきた。

「おねーさん一人なの？」

「もしかして友達とか待ってる～？」

二人とも二十代半ばくらいだろうか。

「おねーさん」と声をかけてきたほうは黒髪で、その隣の男性は明るい金髪。

どちらも水着姿が妙に様になっている、こういう場所で遊び慣れていそうな雰囲気だ。

私は半笑いで胸の前で手を振った。

「いえ、私はただのウェブライターなので…今日はちょっと取材に」

「へー！ ウェブライター！」

「面白そう～」

二人は明るく笑う。

人懐っこいその顔に、私は「チャンスかも」と急いでスマホのボイスレコーダーアプリをタップした。

「もしかしてお二人、軽いインタビューとかって大丈夫ですか？」

「おお、すごい、取材っぽい！」

「いいよ～、なになに？」

軽いノリが助かる。

私は二人の簡単なプロフィールから、ナイトプールの中でもここを選んだ理由、どういう楽しみ方をしているか、などを質問していった。

「正直ナンパ目的だよ」

黒髪のほうは智紀（ともき）くん、金髪のほうは悠生（ゆうせい）くんと言うらしい。

智紀くんが苦笑しながらそう言った。

「まーでも、このプールはハズレかもねー。女の子たちみんな友達と楽しむために来ましてって感じで…相手に

してくんなくて」

そう続けながら、でも残念、という顔はしていない。
悠生くんも笑う。

「せっかくこの日のためにオナ禁してきたのにね～」

…下品な言葉が出てきて一瞬怯んだ。

「へー…、ナイトプールって本当にそういう目的で来る人たちがいるんですね…」

とりあえず無難に返したつもりだけれど、うまく誤魔化せたかは分からない。

一通り聞きたいことは聞けたので、私はインタビューを終えようとボイスレコーダーの停止ボタンをタップした。

けれど、二人は私を逃がすつもりはないらしい。

「ねえ、お姉さんもせっかくだからプール入ろうよ！」

悠生くんは右腕を掴まれ、

「そうそう、実際入ったほうが記事も充実するかもだし」

智紀くんは左腕を掴まれた。

「え、いや、私はあくまで仕事で…」

「オレたちが借りてきた浮き輪使っていいからさ！」

「せっかく来たんだったらちょっとあそぼ♡」

スマホも首から下げていた防水ポーチも、智紀くんは奪われた。

スマホをそのポーチへしまうと智紀くんは自分の首へかけてしまう。

これで、私は逃げられなくなった。

連れて行かれた先は波が出る深いプール。

ところどころに浮いたプールライトが淡く光り、ちょっといやらしい雰囲気だ。

そのライトに紛れるように、いくつかのカップルが体を密着させ揺られている。

浮き輪を頭から被せられた私は、二人に浮き輪の紐を引っ張られながらその中を奥まで進んだ。

一番深いところで180センチ。

波が出る時間帯じゃなくても、私では到底足などつか

ない。

「もっと深いところ行っちゃおう」

「大丈夫、オレたちがちゃんと浮き輪掴んでるからね
～」

二人ははしゃぎながらどんどんと奥へ進んでいく。

……楽しそう。

普段だったら絶対に関わらないであろう人種だけど、
せっかくだから少しだけ仕事のことを忘れてもいいかも
しれない。

でも。

(ん…?)

私が一瞬体を強張らせたのは、後ろにいた智紀くん
に腰を掴まれたからだ。

その手は私の腰を少し押して、すぐに離れた。

振り返ると、「早く奥まで行こ？」と智紀くんは笑顔
で首を傾げる。

目的の深い場所へ行くまでにそんなことが何度もあ
った。

腰どころかお尻を押されたし、胸のあたりも触られた。

(この流れ…、まずいんじゃ)

そう思ってももう遅い。

足がつかない上、私の体を支える浮き輪は彼らが掴んでいて、スマホは智紀くんが首から下げているのだ。

「あはは、俺たちもギリギリになってきた」

「爪先立ちでギリだな～！」

二人が前後から浮き輪に掴まり、体重がかかると大きく揺れた。

顔も体も近い。

閉じ込められているみたい。

そこで、二人はにやりと笑った。

「…お姉さんってさあ、本当にこういうところ来ないんだね。もっと気をつけたほうがいいよ？」

「この慣れてない感じがまたいいんだけど…。さ、俺たちとあそぼっか♡」

二人の片腕が浮き輪から離れたかと思えば。

始まってしまった。

「…あっ」

浮き輪の下、水中で二人の手が私の体を触った。

水に弛むパーカーの下、水着の生地を、つつ…♡と指先が動く。

「ちょ、ちょっと待って、私こんなつもりは、」

「こらこら、浮き輪掴んでないと危ないよ？♡」

二人の手が。

太もも、腰、お腹、脇腹と撫でて。

「……っ！」

胸…、まで触られてしまった。

さり…っ♡

ざらついた生地を指先が滑る。

さり♡

「…ちょ、っと」

胸の下から。

さり、さり♡

「っ、」

横、

さり、さり♡

「うっ」

輪郭を辿り、上側まで来て、

さり…♡

「は、っ」

乳輪に指先が食い込んで、

さり…っ♡

「…ッ！」

そのまま、まだ反応のない乳首を撫で下ろした。

(や、ば…！)

じわぁ……♡♡

両方の乳首を二人に刺激され、湧き上がる焦れったさに体が反応してしまう。

一度乳首に触れた二人の指は、今度はそこから離れなかった。

さりっ♡ さり、さり♡ さり♡ さり♡

微かに膨らむ乳首を爪の先で撫で回し、ときどき上下する。

さり♡ さり♡

「っ、あ、やめ」

さりっ♡ さり…♡

「あ～♡ 勃ってきたね～？♡」

「おねーさんの乳首、頑張って水着押し上げてるよ♡」

さりさり♡ さりっ♡ さりっ♡

「…ッうん♡」

さりっ♡ さりっ♡ さりっ♡

「もう指引っかかっちゃう♡」

「水中布越しゴシゴシ、きもちーねー♡」

さり♡ さり♡ さりさり…♡ こしっ♡

ぴん♡ ぴん♡ さわ…さわ…♡ さりさりさり…♡

「っ、あ♡ あ…、♡ あ♡ だ、め…♡」

「でもお姉さん感じてるでしょ、体ビクビクさせちゃっ

てさ♡」

「下から上にピンッ♡てされるの好きなんだ？ お腹までピクッてする♡」

腰に巻かれる智紀くんの足。

私はただ浮き輪にしがみついて、されるがままだ。

プール自体、人はまばらだった。

きっと他の人たちと同じように私たちもプールライトに紛れているだろう。

だからってこんなところで声なんて出せない。

体の奥から湧き上がる、私の意識を流してしまいそうな感覚に私は奥歯を噛み締める。

さり、さり…♡

さりさり♡ ぴんっぴんっぴんっ♡

こし、こし、こし、こし♡

「…ッ、♡ん♡…っ、ふ♡う♡」

乳首だけを刺激され続け、そこに血が流れ込んでいくのが分かる。

勃てば勃つほど水着の細かな繊維を感じるほどに敏感になって。

さわあ♡さわあ♡ …ぴんっ♡ぴんっ♡
さりさりさりさりさりっ♡♡

「…〜〜〜っ♡ ツ、く♡ っ♡♡」

体をくねらせてしまう♡♡

「硬くなってるよ♡ 乳首気持ちよくてしょうがないね
〜♡」

「もうそろそろこっちも欲しいかな？♡」

「…！」

智紀くんの手が下半身まで移動してきた♡

狙っている場所なんてもう想像がつく♡

そこまで乳首みたいに水着越しにさりさり♡されたら
…、もう戻れなくなってしまう♡

「おねーさんのクリはー…♡ このへんかな？♡」

水着の皺を伸ばすように中指が布を引っ張り、
人差し指が、

すりい♡♡♡

「あッ…っ！♡♡」

クリトリスを擦った♡

瞬間、体が大きく揺れて、一気に熱くなる♡

「クリそんなきもちーんだ？♡」

「……っ、」

智紀くんの息が耳の後ろに当たる♡

ぞくぞく、そんなことでも煽られる♡

「じゃあいっぱい擦ってあげるから♡ 頑張って声我慢してね♡」

すり♡ すりすり♡ すりすりすり…♡♡

「…ッ♡ ん♡ っ！♡ …ッ♡」

腰、逃げたくて動かすけれど、智紀くんの足に捕まっ
ていて敵わない♡

さり♡さり♡ こしこしこしこし…♡ ぴんっぴんっ
ぴんっ♡

「…ふ♡あ♡♡ っう♡ …ン♡」

前からは、楽しそうに目を細める悠生くん乳首を刺
激され続ける♡

すりすりすり♡ すりっ♡すりっ♡ すりい…♡ すりい…♡

こしこし、こしこし♡ ピンピンピンピンっ♡ ふわあ♡ふわあ♡

「……ッ♡ っ♡ っあ♡ あー…ッ♡♡」

こんなのためなのに、たまらなくなっていく…♡♡

「目とろんってしてきた～♡ もう乳首直接触ってあげたい♡ いいよね♡」

「じゃあクリも…♡」

「っ、うそ、」

胸元とクリトリスの部分をずらす二人の手♡

拒む隙もなく、私はプールの中で片方のおっぱいとおまんこを露出してしまった♡♡

「勃起乳首かわい～♡ 水着で潰されてて可哀想だったねえ♡ いっぱいいい子いい子してあげるね♡」

「ふっう…！♡♡」

悠生くんは大きな手のひらで胸を包むと人差し指と中

指で勃起の付け根を挟んだ♡

きゅん♡と勃ったそこに程よい圧をかけられて息が漏れる♡

「あは♡ クリもちょっと硬くなってるわ♡ あれー？
しかも濡れてない？♡」

「うあっ」

智紀くんの指はクリトリスを何度かタップし、中指をさらに奥へ滑り込ませてきた♡

濡れた筋をなぞる指♡

愛液を広げるように何度か往復して、

「濡れすぎててこのまま入っちゃいそ…、あーほら、簡単に入っちゃった♡♡」

「…ッ！♡♡」

中指が体の中を撫でながら入ってきた♡

♡

一瞬冷たい感触がして、すぐに消える♡

「…ねえお姉さん、気持ちよくしてあげるからこのままイって？♡ お姉さんがイくところ見たい♡」

「乳首もクリも反応いいし、いつもここでオナってんだ

る♡ イって見せて♡」

きゅっ♡ きゅう♡♡

乳首を挟まれ♡

くちゅ♡ くちゅちゅ♡

薬指まで挿入され、さらに押し込まれて♡

曲げた人差し指の関節でクリトリスを潰される♡

「…っ♡ ま、まって、」

乳首もクリトリスもおまんこも一緒に触られて、わけが分からない♡

必死に浮き輪にしがみつки、でも足は勝手に開いていく♡

「だめ♡ 待たな〜い♡」

「ほら、気持ちよくなる♡」

きゅ…っ♡

くちゅっ♡

「…ッあ♡♡」

二人の指は動き出した♡

きゅ♡ こすっ♡ きゅうっ♡♡ こすこすっ♡

「っ♡ あ♡ …ッ♡ ん…！♡」

乳首を挟む悠生くんの指は勃起乳首を挟んでときどき
上下に乳首を揺らし♡

くちゅ♡ くちゅちゅっ♡ くちゅ、くちゅっ♡♡

「……う♡ っ♡♡ ツあ！♡ ツ！♡♡」

智紀くんは二本の指の腹でGスポットを刺激し、クリ
トリスを擦る♡

きゅ♡こす♡ きゅ♡♡こすっ♡♡ きゅううっ♡
♡ こすこすこすっ♡♡

くちゅん、くちゅん、くちゅんっ♡♡ ぐち、ぐち、
ぐち、ぐちッ♡♡

「ッ♡ あ♡♡ あー……ッ！♡ っ♡ っ、んン！♡
♡」

きゅ〜〜…♡♡ こすっこすっこすっこすっこすっ♡
♡

くちゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡ ぐちッぐちッぐち
ッ♡♡

「体すっごく力入っちゃてる♡ 完勃起乳首もっと気持ち
よくなっちゃうねえ♡♡」

「自分で腰突き出してるの気付いてる？♡ イく準備で
きてえらいえらい♡♡」

足がピンと伸び、足先が丸まって♡

指が深く食い込むほど浮き輪にしがみつくと♡

体が強張れば強張るほど気持ちいいのが強くなって♡

きゅっ♡♡きゅっ♡ こすこすこすこすこす…っ♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅっ♡♡ ぐちぐちぐちぐち

ぐち…っ♡♡

「……………っ、だ、だめ♡♡ イっちゃう、……！♡♡
待……………っ、う！！♡♡♡♡」

突き出した腰がカクカクと震えた♡

「っ、う、……ふ————っ♡♡♡」

大きな声を我慢した代わりに漏れる息♡

顎を上げて余韻に耐える私に、前にいた悠生くんが体を寄せてきた♡

「オレもう我慢できないから…許してね♡」

浮き輪の下で何やらごそごそと動いたかと思えば、片足を担ぎ上げられた♡

今度は体が悠生くんには捕まっている♡

そのときに当たった熱くて硬いものに、私は浮き輪の狭い空間で後ずさる♡

「うそ、うそ…！」

「ちょっといちゃいちゃしてたって分かんないよ♡ オレこんなちんぽおっ勃てたままプールから上がれないんだから♡♡」

足の間に悠生くんの腰が触れて、

ぬ♡

ぬちゅう♡♡♡

ずらした水着の隙間からおまんこの入り口に亀頭を当てられると、ゆっくりと進んできてしまった♡♡

「…、……ッ♡♡」

「あ〜〜♡♡ お姉さんのおまんこの中あったか〜♡♡」

指じゃない、熱いおちんぼで濡れた中を広げられる♡
カリが壁をゴリゴリと抉って進むからそのたびに肌が
粟立つ♡♡♡

(……だめだ、これ気持ちいい♡♡♡)

体の中から湧く淡く広がる気持ちよさに、ぽかんと顎
が落ちた♡

悠生くんは浮き輪に乗せていた手で私の後頭部を支え
ると、そのままキスをして♡♡

ぱちゅ、ぱちゅ♡

腰を動かし始める♡

ぱちゅ、ぱちゅ、ぱちゅ♡♡

「っ♡♡ ん♡あ♡ あっ♡♡」

唇を吸われ、舌に舌を絡められ♡

ぱちゅ、ぱちゅ、ぱちゅ♡♡

「……、っ♡ っふ♡♡ う♡♡」

水中で腰がぶつかる♡

そのたびに奥をじんわりと押される♡♡

ぱちゅ、ぱちゅ、ぱちゅっ♡♡

「ん♡ う、っ♡♡ む♡」

気付けば舌は悠生くんの口内へ誘い込まれ、唇で扱かれた♡♡

悠生くんのピストンに水面が波打っている♡
その勢いはだんだんと増していった♡♡

ぱちゅッ♡♡ ぱちゅッ♡♡ ぱちゅッ♡♡ ぱちゅッ♡♡ ぱちゅッ♡♡ ぱちゅッ♡♡

「…ッ♡♡ あ♡♡ は、あっ♡ アっ♡♡」
「あ〜〜〜〜きもち♡♡ 水中浮遊セックスきもち〜ね♡腰止まんない♡♡♡」
「ねえおねーさん、もっと気持ちよくなるっか♡」

横から智紀くんが私の耳にキスをしながら、浮き輪の下で下半身に触れてきた♡

悠生くんのおちんぽにずらされている水着をさらにずらし、生のクリトリスに指を当てる♡

「……ッ♡♡♡」
「クリ触られただけでまんこ締めてんの〜？♡」
「じゃあ生クリカリカリしたらどうなっちゃうんだろ♡♡♡」

指が皮を引っ張り上げ♡♡
別の指を裏筋に当てられ♡

カリカリカリカリカリカリッ♡♡

勢いよく上下した♡♡♡
水中の鈍い刺激を、剥き出しのクリトリスに浴びせられる♡♡

「ひ、……！！♡♡♡♡」
「ううわめっちゃ締まる♡♡ 待って待って、出ちゃうから…！♡♡♡」

ぱちゅんッ！♡♡
途端に悠生くんがおちんぽを突き入れ♡
ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡
♡

思い切り腰を振り始めた♡♡

カリカリカリカリカリカリッ♡♡
ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡
♡

カリカリカリカリカリカリッ♡♡
ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



「……ふ、う♡♡♡ うッ♡♡ つ、つよい、おちんぽ
お…♡♡」

「お姉さんのおまんこきもち～♡ ちんぽ喜んじゃって
止まんないよ♡♡♡ もっかいキスしよ、キスしながら
イこ？♡♡♡ ほら、ベーして♡♡」

「クリまた膨らんじゃったね♡ 裏筋カリカリ気持ちいい
ねー♡♡」

カリカリカリカリカリカリッ♡♡

ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



爪で弾かれるクリトリスからビリビリとお腹に響く♡
締めるとおまんこは余計におちんぽに反応して♡奥から
吸着してしまうのが自分でも分かる♡♡

カリカリカリカリカリカリッ♡♡

ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



「……ッ♡♡ あ、ッ♡あ♡あ♡あ♡ …うう♡♡」

カリカリカリカリカリカリッ♡♡

ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



悠生くんは舌を差し出し、目の焦点が合わなくなって



体に気持ちいい感覚が溜まっていく♡♡

「…ッッう♡♡♡ イ、く♡♡いく、…………ッ♡♡♡」

カリカリカリカリカリカリッ♡♡

ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



カリカリカリカリカリカリッ♡♡

ぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッぱちゅんッ！！♡♡



「ッあ…………！！♡♡♡♡」

「あ〜〜〜〜〜出るっ♡♡ 出る…っ♡♡♡」

喉が締めまり、呻き声が漏れた♡♡

それと同時におちんぽが中で小さく震えた♡

「おねーさん♡ 俺もちんこ勃っちゃってるから慰めてくれない？♡♡」

「あ、……っ」

後ろから智紀くんにおちんぽを掴まれ、そのまま強く引き寄せられる♡

ずるり、悠生くんのおちんぽが抜けて♡♡

ぐちゅ…っ♡♡♡

後ろから智紀くんのおちんぽが入ってきた♡♡

太いそれに、イってすぐのおまんこを容赦なく広げられてしまう♡♡♡

「あれ、おねーさんもしっかり興奮してんじゃん♡ イったばっかでもう締まってるよ♡♡♡」

「ち、ちがう」

ぐちゅうッ！♡♡

ぐちゅッ♡♡ ぐちゅッ！♡♡

「んあッ♡♡♡」

「違う？ そっかー、じゃあ俺だけが気持ちよくなっち

やうのかー♡♡」

ぐちゅッ！♡ ぐちゅッ！♡ ぐちゅッ！♡ ぐちゅッ！♡

最初から強いピストン♡

おちんぼの幹の太さを教え込まれるような♡

しかも奥を突くと同時に私の腰を引き寄せるから、もっと挟られる♡♡

ぐちゅッ！♡♡ ぐちゅッ！♡♡ ぐちゅッ！♡♡
ぐちゅッ！♡♡ ぐちゅッ！♡♡

「あ♡あ♡ ッ♡♡ ん、…ッ！♡ んっ！♡♡」

「その割に声出ちゃってるけど♡♡」

そうだ、声…。

我慢しないといけないのに♡

「ただおまんこ使われるんじゃ可哀想だよねえ♡♡ 乳首すごく気持ちよさそうだったから、またしてあげる♡」

「…！ だめ、しないで…！」

悠生くんの腕が水中へ消えて、水着からはみ出たまま
だった私の乳首を♡♡

ピンピンッ♡♡

と弾いた♡♡♡

「ふッ、く…！！♡♡♡」

さっきのクリトリスと一緒に♡ 水の中の鈍い刺激が
乳首を叩く♡♡

外では味わえない感覚に体が喜んでしまう♡♡♡

「おねーさんが気持ちよさそうでこっちも興奮するわ…
♡」

智紀くんの指が腰に食い込む♡♡

ぐッ、ちゅん！♡♡♡

「……っ、！！♡♡♡♡」

水が跳ねるほどの勢いで腰をぶつけられ、智紀くんは
そのままピストンを続けた♡♡♡

ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅん
ッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡

おまんこの奥を潰すようにおちんぽを突き込まれ、
ピンピンピンッ♡♡ こりこり、こりこり♡♡ くり
ゆりゆりゆ…♡♡
乳首は鈍く弄ばれる♡

いったばかりなのに、おまんこも乳首も重ねられる快
感を追いかけるようにどんどん敏感になっていく♡♡

「あッ♡ あ、…ッう♡♡ あ♡♡」
「あーやべ…、とろっとろで、でも締めてくれて♡お
姉さんのまんこ気持ちよすぎんだけど♡♡♡」

ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅん
ッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡
ぴんっぴんっぴんっ！♡♡ …ぐりゅ、ぐりゅ♡ カ
リカリカリカリ……ッ♡♡♡

智紀くんは後ろから私のうなじに、悠生くんは前から
首筋に顔を埋めてきた♡

浮き輪の下の冷たい体とは違う、そこだけ二人の体温
を感じて熱い♡♡

私はその二人の熱を感じながら喉をそらす♡

ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡ ぐちゅん
ッ！！♡♡ ぐちゅんッ！！♡♡

カリカリカリカリッ♡♡ きゅむ、きゅむ、きゅむっ
♡♡ きゅ〜〜〜……ッ♡♡♡

「……や、あ…♡ あ、ッ♡♡ きもち、の、だめなの
に…♡♡♡」

「あは♡ やっぱ気持ちいいんじゃない♡♡ 素直になれ
♡ ちんぽいいって♡ ちんぽでイクって言え♡♡」

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

「……ッお♡♡ っ♡♡♡」

ペースが上がった♡♡

私のお尻と智紀くんの腰が水中でぶつかって弛み、勢
いで胸を突き出すと尖り切った乳首を悠生くんに扱かれ
る♡♡

ビリビリと鋭い快感が体の中を走り回る♡♡

(…あああ♡♡♡ 気持ちよくて何も考えたくなくなる
♡♡ このままイきたい♡イかされたい♡♡)

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

きゅ〜〜ッ♡♡ きゅ〜〜〜…ッ♡♡♡ しこしこし
こしこしこッ♡♡♡

「……は、う♡ き、きもちい、♡♡ ちんぽきもちい
い〜〜〜っ♡♡♡ おまんこも乳首もきもちよくなっ
ちゃってる…！♡♡♡」

「そなん言いながらまんこ締めるのずるい♡♡ この
ままズコバコしてイっちゃおうな♡ほら一緒にイこ♡♡
♡」

「イク、いっしょ、に…♡♡♡ いくいく♡♡♡」

自ら足ピン……♡♡♡

さっきみたいに指先を握り込めば、お腹にもおまんこ
にも力が入り、快感が体中に広がった♡♡♡

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

しこしこしこお♡♡ きゅッきゅッきゅッきゅッ♡♡
♡ シコシコシコシコしこおッ♡♡♡

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

「おっ♡♡ お♡ん♡ おおおっ…！♡♡ イくっ、い
く……っ！！♡♡♡♡」

「っ……ふう、俺も♡イクよ♡♡♡」

体が絶頂へ近づいてカタカタと震え♡

その瞬間、二人にうなじと首筋の薄い皮膚に吸いつか
れて♡♡

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

ぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅんッぐちゅん
ッぐちゅんッ！！♡♡♡

「イ、く………ッ、あ………ツツツ！！！！♡♡♡♡」

「……ッ♡♡ う♡♡」

びたんっ♡♡♡♡

お尻に智紀くんの腰がぶつけられた♡

おちんぼの付け根からドクドクと脈打っている♡♡

射精してる……♡♡♡

すっかり絶頂に浸っていた私はそれすら嬉しく感じてしまった♡

智紀くんの私の腰を掴んでいた手が、そのまま私を抱くように回ってきた♡

二人は私から顔を離し、にこりと笑う♡

「おねーさんもこんなんじゃ足らねーよな♡」

「せっかく出会えたんだからさ～、もっと楽しまないとね♡♡」

水着を整えて波のプールを出ると下半身がとんでもなくだるかった。

水中で何度もイカされればこうなるのか…と驚く。もちろんそんなこと知ったところで記事には書けないけれど。

——二人に手を引かれ連れて行かれたのは、休憩スペースの隅。

「…ん、お♡っ♡あ♡♡あ———……♡♡♡」

ぶぢゅっ♡♡ぢゅ♡ぢゅ♡ぢゅるっ♡ぢゅるッ♡



大人が三人は座れそうな大きな貝殻型のエアースファ。

確かこのスペースは要予約の有料スペースだ。

そのためかソファごとにカーテンで仕切られていて、
周りを気にせず過ごせるようになっている。

雰囲気はいかにも、って感じだった。

私はそのソファの上に、手足を放り出して転がされて
いる♡

足の間には智紀くん♡

水着をずらし、私のクリトリスにしゃぶりついている



ぢゅッ♡ぢゅむっ♡ぢゅむんっ♡♡

包皮ごと口に頬張り、

ぢゅ、ぢゅ……っ♡♡

吸い上げて、

ぢゅ〜〜〜〜……ッ♡♡

唇を細かに振動させて包皮の中のクリトリスを刺激し、

……っっぽ！♡♡♡

一気に解放♡♡

「…〜〜〜〜〜っ♡♡♡♡♡」

声が漏れそうになるのをなんとか耐えた♡

人はいなかったけれど、とは言え外であることに代わりはない♡♡

「皮はぷるぷるなのに中のクリはすっかり硬くなっちゃったね♡ しゃぶりがいいあるよ♡♡ クンニ好き？♡吸うのと舐めるのどっちが好きなのー？♡♡」

ぶぢゅ、るるっ♡♡

れろっ♡♡れろっ♡♡れろっ♡♡ れろお♡♡♡

智紀くんが上目遣いで私を見ながら続ける♡

「…ッ♡ お♡お♡ ど、どっち、も……♡♡ お、あッ♡♡ あああっ♡♡」

言い終わらないうちに智紀くんはまた口内へ吸い上げてしまった♡♡♡

ぢゅ〜〜〜〜〜……ッッッ♡♡♡

「んうッ♡ お♡♡ おおお、っ♡♡ つよいつ♡」

血が止まってしまうんじゃないかってくらい強く♡吸
って♡

れろッ♡♡ れろれろれろれろッッ！♡♡♡

「んんうう…………っ！！♡♡♡♡」

ざらついた舌の腹を、はみ出している生クリに擦り付
けてくる♡♡

ぢゅ〜〜〜〜ッ♡♡♡

れろれろれろれろれろッッ！！♡♡♡

「おッ♡♡ ほ♡ おお…っ♡♡♡」

ぢゅ〜〜〜〜ッ♡♡♡

れろれろれろれろれろッッ！！♡♡♡

「それ、や、ばあ…………っ！！♡♡ ざらざら、やば…！！
♡♡♡♡」

どこにも逃すことのできない気持ちよさに腰をくねら
せてしまう♡

それでもおまんこは智紀くんに向かって仰向いたまま
だ♡♡

その私の上半身に、悠生くんが覆い被さってきた♡♡

「オレも…♡ このコリコリに勃起したエロ乳首しゃぶ
りたい♡♡」

「あ…♡♡」

悠生くんもまた水着をずらし、はみ出させた乳首に舌を這わせた♡♡

べろお…♡♡ べろ、べろ♡

「ふッ、お♡♡ おンっ♡♡」

そうしながらもう片方の乳首是水着の上から♡

さりッ♡♡ さりさりさりさりッ♡♡♡

「おッ、あ……っ！♡♡♡ これ♡すっごい♡♡水着越しにされるのいいー～…！♡♡♡」

爪を立てて、勃起乳首を擦ってくる♡♡

ぢゅ～～～～～ッ♡♡♡

れろれろれろれろれろッ！！♡♡♡

べろおっ♡♡ べろっ♡♡ べろっ♡♡ べろべろべろっ♡♡

さりさりさりさりさりさりさりッ♡♡♡

「…ほ、おッ♡♡ おおおっ、っ♡♡♡ ふッ♡う…！♡♡♡」

ぢゅ～～～～～ッ♡♡♡

れろれろれろれろれろッ！！♡♡♡

べろおっ♡♡ べろっ♡♡ べろっ♡♡ べろべろべろっ♡♡

さりさりさりさりさりさりさりッ♡♡♡

「お、お、お…ッ♡♡ ……キてる♡♡ クリぎゅんぎゅん♡♡」

ゅんして♡♡♡ ちくびビリビリ、して…♡♡♡」

■続きは製品版にて♡